



☒ 提案から 私はこう感じ考えた ☒

教師も学び、育つ

上越教育大学助教授 木村吉彦

1 はじめに

かつて中澤先生は、何度か附属小学校の「総単」を参観する機会を持ち、「なにをやっているのかさっぱりわからない」と思ったそうである。ところが、今、彼は「総単がおもしろい」と言う。附属小学校に赴任してまだ1年にもならないのに、である。

この変容はどうして起こったのか、また、いつ頃からそうなったのか。約半年間、中澤先生の実践を見せていただいた者の眼で、この「謎解き」に挑戦してみたい。

2 1学期の姿

この実践報告では、1学期の子供の姿は約3行を使って抽象的に書かれてあるだけである。当然ながら具体的な子供の姿も教師の姿も見えてこない。そこで、私は、中澤先生が校内研究用に作成した「実践レポート」を読み直した。98年5月6日付の01号から6月5日付の07号までである。そこには、私のメモも残されてあった。『「学び」が見えてこない』『日本語がへん』『なにを学んだのか?』と辛辣な言葉が並んでいる。「レポート」に取り上げられている題材は、「遊びに関わる教師の支援とは一体何であろうか」(04号)といった調子の実践の「理論化」の試みや同僚教官の記録の分析やポスターセッション参加者の発言分析等々である。要するに、「おとな」の発想

による子供分析・教育分析なのである。唯一子供の姿から分析しているのは、「Tさんのシートから」(05号)という学習シート分析である。これらの事実は、中澤先生自身「なにをやっているのかさっぱりわからない」状態にあったことを示していると思われた。

3 2学期の姿

この報告には、公開研究会までの活動の中から6つのエピソードと、公開当日の様子および公開授業の自己分析が載っている。つまり、ほとんどが2学期の実践についての報告である。1学期について同様、私は、「実践レポート」を読み直した。9月3日付08号から公開直前の12月2日付25号までである。まず、9月に入ってすぐの08号で、私は「あれっ」と思った。まず、子供たちの言葉の紹介から話が組み立てられている。そして、09号では、子供の言葉が観点別(<毛><突進・突撃><俊足><うんち>といった具合である。)にまとめられてある。子供たち一人一人の「気づき」が具体的に書かれている。子供の具体的な姿から子供の学びや発見の姿を捉え始めている。さらに10号では、「今後、羊の品種について関心が高まることを意識して発した言葉です」というように、子供の学びを誘発しようとしている姿も現れている。11号では、「9月7日現在の子供たちの様子は次のとおりで

す。」として、「羊に触れる人 34人全員」から「羊が怖い人 6人」まで、一覧にして載せている。12号からは、今までイニシャルで書いていた子供を固有名詞で書くようになっていく。

このように、号を追うごとにその内容が具体的・個別的になり、しかも所要所でクラスの全体像や保護者の反応などが紹介されている。一人一人が見えることで、「総単」が日に日に楽しくなっていく様子が手に取るように分かる。「一人一人が見える」とは、①一人一人の発言が耳に入る。②一人一人の興味のありかがわかる。③一人一人の気づいたことがわかる。つまりは、④一人一人の学びの姿がわかることである。そうなると逆に学級全体の姿も見えてくるし、クラスの外（他クラス・学校全体・保護者）にも目が向く。こうして、「子供理解のサイクル」が回り出す。

4 謎を探る

いよいよ謎解きに入ろう。中澤先生の2学期に入ってからの変貌ぶりをどう考えたいのだろうか。

まず、なぜ1学期は「なにがなんだかわからなかった」のだろうか。それは、子供の姿をたった3行で、しかも全体像を書こうとしていることからわかる。最初から「全体」を見ようとしていたのである。一人一人違う子供たちなのに、「全部の子供」を一括して描こうとしたのである。もっと言えば、一斉授業のイメージから逃れられなかったのである。それに対して、2学期からは子供一人一人の発言をきちんと個別的に紙上に載せることを始めた。これが変容の第一の理由である。

次に、中澤先生は、予告なしに9月1日、羊を教室の前に連れてきた。当然子供たちは

興味津々である。つまり、先生が子供に対して「仕掛けた」のである。思えば、「主体性の発揮」や「自分らしさの発揮」は子供にだけ求められるものではない。教師自身が「自分らしく」振る舞ってはじめて子供も安心して「自分らしく」なれるのである。先生は、1学期の学習活動はかなり反省し、「自分らしく」なかったと考えたのではないだろうか。（少なくとも私にはそう見えた。）そこを吹っ切って羊で仕掛けたのである。自分の考える教育がしたくて。基本的に、学びのきっかけは教師・子供どちらにあってもいいと思う。要は、お互いが主体的に学習材に関われることである。教師にとっても興味・関心のつきない学習材であればこそ、積極的に関わられるし、子供たちの気持ちも分かる、というものである。そこで初めて、「子供の意識の流れ」がつかめるのである。

これから、羊の出産があるかもしれない。冬季の飼育に賛成しなかったI君が直感した「生と死」の問題を、子供たちがより深く考えるチャンスが巡ってきそうである。学習材としての羊には、子供たちにとっても中澤先生にとってもまだまだ魅力的な学びが秘められている。

以上、具体的な「教師」の姿から、みとりと支援の在り方について考えた。「自分らしくあること」については、「教師」も「子供」も対等なのである。